

言葉と文字と絵の怪しい関係

Artdirection, Graphicdesign, Typography

アートディレクター
浅葉 克己

■怪しげな講義を

今日のタイトルは「言葉と文字と絵の怪しい関係」となっています。「怪しい」というのはいいですね。世の中なんとなく怪しいですから。

■甲羅に甲骨文字

まずはこんなものをお見せしましょう（左写真）。カメの甲羅に漢字の元である甲骨文字が刻まれています。北京や上海など中国各地を10年ほど探し歩いてもなかなか見つかったのですが、殷王朝があった安陽の街で結構売っていました。発見されてから110年くらいです。甲骨文字は漢字の原点なので、すぐ解読できたようです。解読したものと一緒に回しますので見てください。



右は私のロゴタイプです。三角を標榜しているようですが、形の中にいろいろとナゾがあり、それを追っていったらこういうものが出来ていたというわけです。

右の図は私の事務所です。設計を依頼したデザイナーが、最初は四角いスケッチを送ってきたので、つまらないなと言った

ら入口を木にして、末広がりのように奥に向かって広がっていく家を作ってくれました。



■80人が描いた絨毯

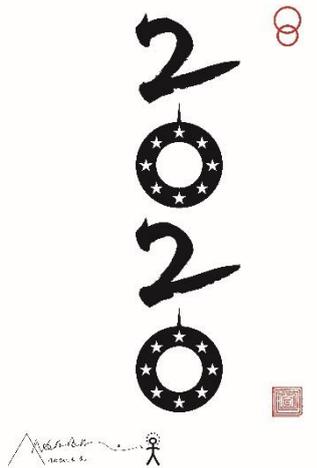
中国にジャンピン・ヘというデザイナーがいます。故郷の杭州に大きな事務所を構えていて、ベルリンに渡って10年間勉強し、ベルリンにも事務所を持っています。その彼が私の80歳を記念してとんでもないことを考えてくれました。海外の50人と日本の30人に原画を描いてもらい、ネパールで絨毯にしてくれたのです。その巻き物を持ってきたので、初公開ですがぜひ見てもらいたいと思います。4月に上海のギャラリーで公開する予定だったのですが、コロナで延びてしまいました。日本でやるところもなかなかないですが、できたら佐倉でもやりたいですね。



■ひとりピンポン外交

私はひとりピンポン外交というのをずっと続けています。「浅葉克己のひとりピンポン外交」(右写真)は209号を数え、今回はジャンピン・へが作った耳のついた本がマスクをしているデザインをあしらいました。この本は国際グラフィック連盟 (AGI) の新人たちを紹介したものです。AGIは毎年いろんな国でデザイン会議を開いていて、今年は上海でやる予定です。ジャンピン・へは面白い名前で、漢字では何見平と書きます。この本を本箱に入ると耳だけがはみ出るので、この耳を引っ張って本を出すのですが、何見平の耳を引っ張っているようで面白いです。

私の座右の銘のようなものを紹介しましょう。「探検隊員を求む。至難の旅。わずかな報酬。極寒。暗黒の長い月日。絶えざる危険。生還の保証なし。成功の暁には名誉と称賛を得る——アーネスト・シャックルトン」。これはロンドンタイムスに掲載された小さな広告です。募集したのは20人くらいだったのに、言葉に感動して500人も応募したそうです。やはり言葉というのはすごく大事です。私は世界中をかなり回りましたが、まだ南極には行っていません。ペンギンを見たくて、行く計画もあったのですが、途中の海が嵐で危険だからやめたほうがいいと言われて諦めました。

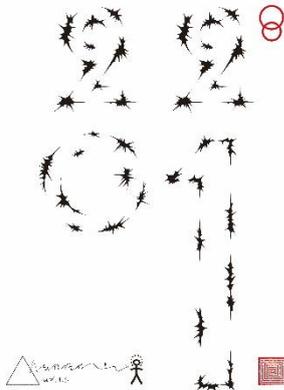


地球文字探検家という本を出したことがあります。世界にはたくさんの文字がありますが、中国から漢字を借り、そこから平仮名やカタカナを作ったのは日本人らしいです。漢字は5万字あるとも8万字あるとも言われていますが、もし中国が版權をタテに、例えばサンズイを返せと言ってきたら浅葉の浅は書けなくなったりして困りますね。しんにゅうを返すとなったら、道は首になってしまう。トンパ文字という不思議な文字が中国にあり、随分探したこともありました。

■2枚の年賀状に込めた思い

私は年賀状というものを大事にしている、毎年、年号をデザインしたものを1枚、旅行で感動したことなどを書いたものを1枚の計2枚出しています。2020年の年賀状は上の2枚。右の写真はドイツの造形大学であるバウハウスが100周年を迎えたのを機に行った時のもので、機関車が置いてある博物館が映っています。

下の2枚は2021年です。絵は奥村靱正というアーティストの作品で、80歳になった私が卓球をしていて、頭にピンポン玉がぶつかった様子を描いてくれました。



■イッセイジャンパー

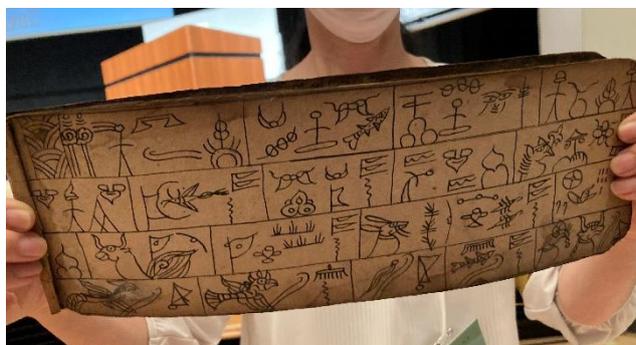


三宅一生さんが、僕の作品で何か作りたいと言って作ったのが、今日着ているジャンパーです。トンパ占いを現代風にアレンジしたトンパタロットや、今年の干支であるトラのデザインなどがあしらわれています。もう売っているそうですよ。今日はジャンパーを着ると暑いですが、お見せしたくて我慢して着てきました。



■うれしいことがやってきた

左の文字がトンパ文字で、これは「うれしいことがやってきた」と書いてあるそうです。中国雲南省の麗江に行くと、その年のめでたいことをトンパ文字で書いた書が街中に貼ってあります。普通の人は漢字を勉強していて、トンパ文字を読めませんが、私の先生である西田竜雄さんに解説していただきました。



今日はトンパの経典(左写真)も持ってきたので、ぜひ見ていただこうと思います。雲南省の麗江の骨董屋さんに行った時、奥にこの経典が積んであって、「トンパの経典じゃないの？」と聞いたら、店主が「そうだ」と言ってカーテンを開けるんですね。そして、酔っぱらわせて買わそうというのか、強い酒を勧めるんですよ。旅行中だから30万円くらいしかなくて、「これでぜんぶちょうだい」と言って30冊買ってきました。持

ち出しは禁止されているのですが、空港の検査は金属探知機なので大丈夫でした。ちなみに、10年くらい前に「トンパの経典が手に入ったのですがお買いになりますか。1冊250万円でいかがでしょう」という手紙が来ましたよ。

■人間、玄米茶はコシヒカリ

右は麒麟の玄米茶の広告ポスターです。コピーは「人間、玄米茶はコシヒカリ」。字は「米」なのですが、アニメーションも作ったところ、千年くらい動かなかったトンパ文字が動いたというので、中国の



人が「トンパが動いた」と目がテンになっていました。

左は雲南省麗江の古い美術館で開催した「浅葉克己トンパ文字芸術展」のポスターです。真ん中の写真はフクロウが飛んでいるところ。フクロウは大概じっとしていますから貴重な写真です。アメリカの写真家の作品なのですが、写真を使わせてくれと連絡しようとしたら、どうしてもつかまらなくて困りました。黙って使うしかなかったのですが、幸い文句は来ませんでした。上はトンパ、下はカエルを表すトンパ文字です。何となく似ていますよね。



■「展」の字がなくて・・・

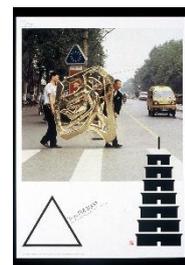
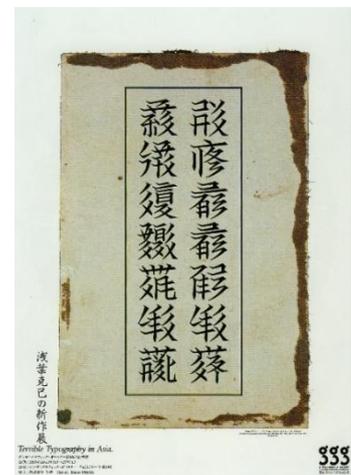
右上のポスターのトンパ文字は「浅葉克己展」と書いてあります。1番上が「浅い」という字、2番目は「葉っぱ」、「克」はなぜか頭が爆発しています。「己」はおのれですから自分を指している。最後の「展」について西田先生に尋ねたら、あんな古い時代に展覧会なんかなかったそうで、「展」の字もないとのこと。すると先生は、扉が「開く」という字があるのでどうでしょうということで、そうしました。古い文字を研究したり使う時は、言語学者と組んでやるのが肝要ですね。

■気が大事

右下は西夏文字。800年前に滅びた西夏国で使われていた文字です。トンパ文字や西夏文字を解説し、本も出している西田先生にテキストを書いてもらったのを参考に、香港で書いたと思います。周りの汚れのようなものは、アルバムの写真をはがした時に、写真の裏にくっついてくる糊の痕で、何となくいいと思ってあしらいました。何気ないものを見て「これいいんじゃないの」と気付いて作品作りに生かすのが創作の醍醐味だと思います。人間というのは、ぱっと気が付いても意外と忘れちゃいますね。左のポスターもいったん貼ってはがし、その

痕跡を利用してコラージュ風に作ったポスターです。インドで作ったのですが、バックの風合いがなかなか味わい深いでしょ。

ポスターの制作は今ではほとんどコンピューターで処理していますが、昔はいちいち版下というものを作っていました。ある時、物置に行ったらそれが全部残っているのが分かり、美術館の人が「浅葉さん、これは大変なものですよ。ぜひ発表しましょう」と言いました。分類したら10点あって、左下は書分野のものです。右の5つはこれに含まれているものです。

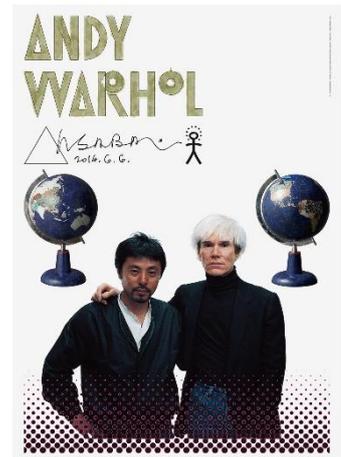


■極寒での雪ねぶた

青森山田高校の理事長からある日電話がかかってきて、「夏はねぶたがあるけれど、冬は何にもないんだよね」と泣きついてきました。そこで雪ねぶたをやるということになり2回やりました。そのポスターが前ページにあります。でも青森の人が「寒くてだめだ」とぼやくので、「おたくが寒いなんて言ってどうする。こっちは東京から来て震えてますよ」と言い返してやりました。その時に氷の卓球台を作って青森の人とゲームをしたのですが、台がいびつなので球が穴に入ったりしてうまくいきませんでした。またやろうかと思っていますけれど。

私は子供がたくさんいるのですが、何とか1人だけでも卓球選手にしたいくて、末っ子の3男に「球」という名前をつけたのですがスケボーに行ってしまいました。私は「キングコング」というチームを持ち、監督をしていて、全国大会で5連覇しています。半分中国人の力を借りてきたのですが、今年は2人来られないというので、「日本人だけじゃだめかなあ」と心配しています。

右の2枚はアンディ・ウォーホルを使ったポスターです。彼の作品は世界で1番高いそうですが、私は1枚だけ持っています。左側はTDKの広告ポスターで、コピーは「イマ人を刺激する」。ニューヨークで一緒に仕事をした際、彼は非常に喜んでくれて、いろんなアーティストを呼んだパーティーに招いてくれました。



三宅一生さんとの仕事もいろいろやりました。左は彼が「陰影」シリーズとして十数種類作った照明器具の中の「雌鶏（めんどり）」です。形がとてもいいですね。「陰影」のロゴも随分有名になりました。

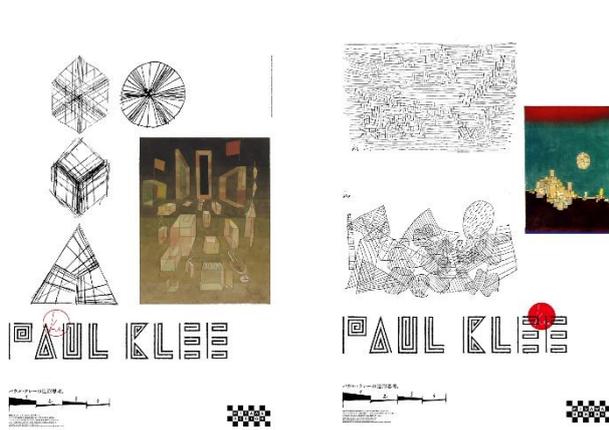
■バウハウスの情熱いまでも

ドイツの造形大学・バウハウスは、多くの有名な作家を輩出しました。もう創立100年にもなるのに、関係者たちの情熱や才能というものはまったく消えていません。そして桑沢デザイン研究所のデザインの基本がバウハウスなんです。私は高校を出て桑沢に入りました。

右はバウハウスを作ったワルター・グロピウスさんが桑沢に来た時のもので、右の下のほうに「私はここに素晴らしいバウハウス精神を見出したが、これこそ私がかねてから望んでいたものであり、東洋と西洋のあいだにかけわたされた、往来自由の創造的な橋である。あなたがたに大きな成功を！」と書かれています。左上には、私が作った研究所のロゴタイプもあしらわれています。



5人のアーティストの作品を使ったミサワホームの広告ポスターを2作品ずつ紹介しましょう。隅っこにあしらわれている MISAWA DESIGN のロゴはもちろん私の作品です。まずはバウハウスで1番有名な先生と言えるパウル・クレイ (①、②)。彼はたくさんの絵や造形に関する本を残し、多くのアーティストにもものすごく影響を与えました。PAUL KLEE の書体は私が書いたものです。次に世界的に有名なカンディンスキー (③、④) です。彼は最初は③の



① パウル・クレー ②



③ カンディンスキー ④



⑤ マックス・ビル ⑥

ような木版画を制作し、後半になって抽象画を描くようになりました。私が1番傑作だと思うのが④です。怪しい生物のようなものが漂っています。次はバウハウスで2年間学んだマックス・ビル(⑤、⑥)。彫刻なども制作する稀有なマルチアーティストで、数学的思考を土台にして芸術を発展させるという志向があったようです。彼はいつもこのような印象的なサインを使います。⑥のような直線で描いた文字も作りました。続いて昨年作ったライオネル・ファイニンガーを使った作品です(⑦、⑧)。⑦は自画像で、⑧はバウハウスを宣伝する時の木版画です。息子さんたちも全員バウハウスに入りました。最後は女性のテキスタイルデザイナーであるグンタ・シュテルツル(⑨、⑩)。⑩の上の写真がグンタ・シュテルツルで、下はバウハウスの女子生徒が階段で並んでいる有名な写真。名前のロゴは、書で書いたものをコンピューターで囲み文字にして、中を色鉛筆で塗りました。



⑦ ライオネル・ファイニンガー ⑧



⑨ グンタ・シュテルツル ⑩

■書は気持ちいいのだ

楷書について私が書き記した原稿がありました。「筆を取ると、自然に何かを書きたくなる」「ぼくは、朝起きると中国机に向かい、硯の重いフタをあけて墨を刷る」「デザインの仕事のウォーミングアップとして、唐代の楷書の名人、褚遂良の雁塔聖教序を1頁臨書する」「トンと筆を落とすと真っ白い半紙に墨が光る。気持ちいいのだ」などと書かれています。

書を書くと思議なことにスケッチもうまくなるんです。書家の人はあまり絵を描きませんが、デザイナーは書もスケッチもやって両方うまくなる。書は最初に臨書をやるのですが、私は学生のころ、それと同時に裸体のデッサンをしていました。高校のころは禁止されていましたがもぐりでね。

右は横浜の小学校1年の時に書いたもの。字が右上がりなのを女性教師の関口先生に直されています。この癖は80になっても直らないもので、不思議なことにどうしても上がっちゃう。でも一応「優」をもらっていますよ。ああ、関口先生、美しかったなあ。



■徹夜で取り組む全臨

航舟流
塔泛開
現表於
兆於法
於慈性

中国の西安に行った時、手本となる古典の全文を臨書する全臨というのをやらされました。夜の8時ごろから始めて、鳥が鳴く朝の4時ごろまで続けるんですが、集中力が落ちてよく間違えます。先生にうまくごまかしてもらおうのですが、なぜか見た人はみんな気が付くのです。

左は今でも続けている臨書で、毎日1枚書いています。顔真卿が44歳の時に書いたものを臨書しています。三重丸じゃおこがましいので、二重丸にしてあります。

下の写真は麗江の街です。明の時代にできた建物が残っているととてもきれいな街です。右はトンパタルトです。上が赤虎、真ん中が神馬に乗る神、下が青いホトトギスで、三宅一生さんはこの3つをそれぞれあしらった3種類のジャンパーを作りました。



【ことばの解説】

甲骨文字 亀甲や獣骨に彫った中国最古の象形文字。占いの結果が細かい文字で彫られている。

トンパ文字 中国雲南省麗江地区に住むナシ(納西)族の宗教儀式で用いられる象形文字。現在も日常的に使われている。

西夏文字 西夏国で作られた文字で、楷書、行書などいくつかの書体がある。漢字を模倣して構成され、合成文字が多い。

西田龍雄 言語学者。専門は東アジアの言語と文字で、西夏語の解説に関する研究が中核をなす。

顔真卿 がん・しんけい。唐代の政治家、書家。国家に対する忠義心の暑い人物として名を残す。

【質疑応答】

Q 書をやるとデッサンが上手になると言われたことに感銘を受けたのですが、どういう因果関係があるのでしょうか。それと私は漢詩に興味があるので、白川静さんの「白川学」を学ぼうと思いましたが、なかなか理解できません。学ぶ上での秘訣があれば教えてください。

A 私は子どものころから絵がうまかったので、デザイナーに推薦されたのだと思います。イラストレーターになりたくて何十年間過ごしたのですが、ある時、文字の権威である佐藤敬之助先生に出会い、「文字の世界は深いなあ」と思って活字の設計などもやるようになりました。そのころ、私は1^ミ間隔の2本の線の中に、烏口を使って10本の線が引けました。私の弟子も10本引けたのですが、途中で精神病院に入ったので、あまりお勧めできませんがね。いまはコンピューターを使えば、10本くらい軽く引けますが、人間の手で引くことがすごく大事なんです。

書道家はほとんど画を描きませんが、両方やったほうが良いと思います。書画同根という言葉があります。書と画は同根、つまり根が一緒であり、字がうまい人は画もうまいはずだということですね。これは中国の言葉ですが、日本でも字のうまい人は確かに画もうまいです。漢字の不思議なところでしょいか。できたら両方やりましょうよ。それとスケッチはやっぱり裸体デッサンが楽しいですね。どこかでやっていませんかえ。

白川静さんはなかなか会ってくれなかったのですが、最後に5年間会ってくれました。私はNHKの番組で、漢字の求道者として漢字を求めて歩くという役目を仰せつかりました。そして、いろんな漢字があって面白い香港の看板街に行き、白川さんに甲骨文字のことなどを聞きました。

Q 最近、デザインの部門が気軽に捉えられていると思います。それはいいことではありますが、デザインの価値がすごく下がっているようにも思います。ニューヨークと東京のデザイナーの報酬が、20年前はほぼ同等だったのに、今は3倍の差がついていると聞きました。デザインの価値を高めるために、後進にどのような背中を示せばいいのでしょうか。

A 例えば、日本にはものすごく深い伝統がありますから、もう一度伝統というものを見直すことも必要でしょう。この間、明治のころの教科書を見つけたのですが、筆で三角や四角などのいろんな形を書いているんです。明治のころはそんなことを生徒にやらせていたんですね。その筆の線がなかなかいいので、これで何か作品を作ろうと思っています。ピカソも筆文字でスケッチを描いていますね。それと、コロナが終わって企業の広告も増えると思いますが、デザイン料を安くしないでほしいです。

Q 孫が3歳のころに描いた絵が非常にいいなあと思ったのですが、小学生になると何か物足りないものになってしまいました。私自身も3歳のころのような絵が描きたいと思って描いてみたのですが、どうしても描けないのです。どうしてでしょうか。

A 子どもの絵っていいですね。でも子どもに下手になれて言うのも難しいですね。ピカソやマチスの絵には、子どもが描いたようなのが沢山ありますから、それを見せてみるのはどうでしょう。私の友だちの安西水丸も、線画で子どものような絵を描くんです。例えば小説の表紙に描いたスイカの絵は、赤い線とグリーン線の2本だけで表現していて感動しました。彼はマチス派だと思います。子どもに水丸の絵を見せたら、下手になるかもしれませんよ。

◇

◇

浅葉さんは講演の最後に、50年も続けているという卓球のマイラケットで、カラフルなピンポン玉を観客席に打ち込んだ。ピンポン玉には浅葉さんのロゴマークが描かれていて、首尾よく手に入れた受講生たちは「思い出深いお土産になった」と大喜びだった。



浅葉克己先生のプロフィール

1940年神奈川県生まれ。

県立神奈川工業高校図案科、桑沢デザイン研究所、佐藤敬之輔タイポグラフィ研究所、ライトパブリシティを経て、1975年浅葉克己デザイン室を設立。

代表的な仕事に、西武百貨店「おいしい生活」、サントリー「夢街道」、武田薬品「肉体疲労にAじゃないか」、ミサワホーム「ミサワ デザイン バウハウス」、イッセイミヤケ関連ロゴなど。

東京 TDC 賞、毎日デザイン賞、日本アカデミー賞最優秀美術賞、東京 ADC 賞グランプリ、亀倉雄策賞、紫綬褒章、旭日小綬章など受賞歴多数。AGI 会員、東京 TDC 理事長、JAGDA 理事、東京 ADC 委員、桑沢デザイン研究所 10 代目所長、東京造形大学・青森大学客員教授などを務める。卓球は六段の腕前。

◎言葉と文字と絵の怪しい関係『Art direction, Graphic design, Typography』

様々なジャンルの広告やグラフィックデザイン・ロゴマークなどを手がけてきているのみならず、言葉を大切にしている浅葉は自ら主筆による書籍も多数発行している。